

撃水餘韻(世に姦ましき婦人)

東 牧 羊

美術と奢侈

婦人向きの美術品、近年益々精巧の域に進むといふ。美術の進歩固より喜ばしきことなれども、由來、美術と奢侈とは極めて深き親戚の間柄なることを忘るべからず。國歩艱難は、たゞに戰爭當時のこととのみ思ふべからず。戦後經營は、啻に戰爭の翌年のこととのみ考ふべからず。二者は今尙現在目前に逍遙しつゝあり、恐くは長き將來に於ても然らん。深く心に銘せざるべからず。

身體自身の美

由來我が婦人は、頭の飾りや衣服等には、中々八釜しく念を入れて金をかけるなり。所謂身の廻りの裝飾には恐ろしく心を凝らすなり。従つて我國の婦人服の模様の如き美術としては、恐らく世界に冠たるものあらん。然れども身體自身の裝飾

に至りては比較的甚だ心を用ひざるが如し。化粧法の如き、頭髮と顔の形との關係の如き、身體の姿勢、こなし方の如き、表情の方法、笑顔の研究の如きつまり、比較的金のかゝらぬ身體其ものを以て對手に美を感じせしむる方の研究は尙大に進まざるが如し。

良妻賢母と教育

良妻賢母たらしむる目的ならば、餘りに高き教育を婦人に受けしむること、少くとも今の時代に於ては考へ物なり。受けたる少數は期望の通りの婚嫁を得べけんも、多數は其時期を失するの悲運を見るなり。實例も多く理由も明白なり。

學問の奴隸(?)

吾が知れる一老婦人あり、齡既に七十七鑿鑿たる健康壯者を凌ぐ。然も能く論じ能く談じ好んで學生を世話し又彼等と伍するを喜ぶ。會々其家に寄寓せし順良可憐の一學生、奮つて試験に及第し某女學校に入る。老婦人歎じて曰く、「わゝいゝ順良

な方は、此上學校に入らずとも何んな立派な所の
奥様にでもなれるものを、近頃の方は、皆學問々
々と仰つて學校にお入りになる、私はそんな方を
學問の奴隷だと申すのです」と氣儘萬丈。

學問と嬉み

學力の進むに従ひ、婦人の嬉み一層高くなるべき
理屈なれども、實際に於ては必らずしも二つのも
のは一致せざるが如し。相當の教育を受け、相當
の學問ある人にして、わたら婦人としての嬉みの缺
けたるが爲めに、他人に指彈せらるゝ人、世に少
からず。「學は禮に終はる」といふ支那の學者の言
葉さへあるに。

金? 金? 金?

「巨萬の富」は、現代男も女も老人も青年も、等し
く其理想とする所のもの、如し。然もこれを得て
果して何に使用すべきかといふことに至りては、
又等しく考へざるに似たり。多くは富を得て、安
心を得んことを希望せるものなるべし。然も一家

の波瀾は常に富者の家庭に於て多く起るを見れば
富者必らずしも安心を得とは限らず、否な「富者の
天國に入るは駱駝の針の孔を通るよりも尙難し」
とさへいはるゝにわらずや。精神的の安心は、物
質的の金によりては、到底得らるべくもわらず。
天命を知り境遇に安んじ其業を樂しむに至りて始
めてこれを得べし。何を着ん何を食はんとて思ひ
煩ふなかれ、野の百合を見よ、空飛ぶ鳥を見よ、
勤めず紡がず、然も神は、これを養ひ給ふとの山
上の教訓、まことに現代黃金熱に病める人の服す
べき良劑ならずや。鶴鶴巢於森林、不過一枝、偃
鼠飲河、不過滿腹、とは莊周の言葉、又以て味ふ
べきにわらずや。

風紀の頹廢

風紀の頹廢今日の如く甚しきはなしといふ人多け
れども、それは疑問なり、事實これを十年若くは二
十年前と比較して如何にあるべき。たゞ今日に於
ては女子が比較的より多く社會の表面に顯はるゝ

が故に、其男子との關係が、一層多く明に、社會に知れ渡るといふことも、大にあることを思はざるべからず。

施恩

他人に恩を施すは善事なり。但し何時々々までも

現代婦人の一缺點

芙 蓉 生

現代婦人には幾多の長所もあり、幾多の美點もあつて、逆も舊思想なる老婦人などの及ぶ所でないことは云はでものことであるが併し壘を得て蜀を望むの類でよい上にも尙善からんことを望むのは強ちに排斥するにも及ぶまいか、そこで吾人が現代の婦人に蜀壘の望を云は、其高等教育の學科中に今少し法律思想を加味せられんことである。實に現代の所謂教育ある婦人なるものは餘りに其思想の超世間的なるか若しくは沒社會的なるかの中である。然るに人は法に生れて法に死するもので行住座臥一刻も法律の範圍を脱することは出来ないものである。殊に今日の所謂文明と云ふのは法治の整頓に仍て益進歩して行くものであるから今日の人は其男女の何れを問はず大に法律的修養を要する次第である。且又有爲轉變は世の習ひであるから今日は輿様として重い物は箸より外に持たぬ様な方でも明日は主人公に代つて内政外交は勿論の事、時には人事紛争の間に理非曲直を訂して自から守るの用意をする必要がないとも限らぬ、否是よりは尙益此種の必要が多々益々起ることだらうと思ふ。殊に婦人に最も近き家事の紛争に關しては法律は極めて親切に種々の實踐倫道を示して居る。民法中の親族篇の如きは其最も著しきものである。幸に太田隆東子は毎號其平易なる説明を以て之を讀者に紹介しつゝあるは、大に時宜に適應せるもので、吾人は讀者の倦むことなく之を通讀せられんことを希望するのである。

恩に着する時に、受けたる人をして謝恩の念を失はしむるのみならず、反つて其人をして怨恨を抱かしむ。施恩の價値は、全くこれを忘失するに存す。聖經に曰く「右の手にて施したるを左の手に知らしむる勿れ」と。